

夏休みの「メディア文化論」古典

佐藤 卓巳

『メディア史・大衆文化論』

ことが多いが、清水は「流言の社会運動史」とでもいえるべき視点を提出している。その上で流言蜚語を国家と国民の感情的結合、つまりナショナルリズムの強度を測る試金石とみていた。戦時下の流言状況を考えれば、日本人の愛国心を過大評価はできないのである。

先週の講義後、一人の学生が教壇に近づいてきた。

「夏休みに古典を読みたいのですが、この講義の関連では何を読めばよいでしょうか」。

教育学部で担当している講義は「メディア文化概論」だが、同じ講義を文学部の学生は「社会学特殊講義」として、あるいは「現代史特殊講義」として受講している。教科書『現代メディア史』（岩波テキストブック、一九九八年）

は改訂新版の必要も感じるが、巻末の「基本文献案内」が古くなっただとは思えない。私が学生時代から読んで血肉となった古典ばかりだからだ。いつもなら、「そこから自由に選べばいい」と突き放すのだが、この原稿が脳裏をよぎった。「戦後七〇年」の夏に薦める「メディア文化論」三冊とは何だろうか。

● 清水幾太郎『流言蜚語』ちくま学芸文庫、二〇一一年

私にとって「古典」とは、自ら執筆するとき心に留めておく参照点となるものだ。いま『考える人』で連載中の「メディア流言の時代」の場合、清水幾太郎『流言蜚語』（日本評論社・一九三七年）である。二・二六事件の一年後に刊行された著作だが、戦後の岩波書店版も長らく品切れが続いていた。三・一一東日本大震災後、「日本人の自然観——関東大震災」などを増補して復刊されている。復刊は嬉しいが、このタイミングと増補は読者に無用のバイアスを与えたのでないか。確かに、初版の序文でも流言に興味を持つたきっかけが幼少期の関東大震災体験だったとある。ただし、原著は二・二六事件直後に執筆した「流言蜚語の社会性」（『中央公

論』一九三六年四月号）および『デマの社会性』（『文芸春秋』同）をまとめたものだ。もし関東大震災の「朝鮮人襲来」流言の恐怖を念頭に構想された書物なら、清水は流言蜚語の「生産性」を繰りかえし説いただろうか。

関東大震災の教訓という設定は当時の検閲者に示した「偽装」であり、二・二六事件が念頭にあったはずだ。このクーデターに対する戒厳令下では徹底したメディア統制が実施された。そこで流言蜚語がいかなる「社会性」をもったのか。情報不足を想像力で補った流言が現実以上に現実的な場合も少なくない。支配者にとってデマは不都合だとしても、民衆にとってデマは必要不可欠な社会参加ではなかったか。

通常のメディア論ではデマや流言は非合理的ノイズと考えられる

● リップマン（掛川トミ子訳）『世論』上下、岩波文庫、一九八七年

清水は流言蜚語を「潜在的輿論」と呼び、そこに参加民主主義の可能性を読み込んでいた。もちろん、「デモクラシーの発達した国々に於いては極めて多くの潜在的輿論が顕在的輿論に発達する機会を持つ」と書く清水も、リップマン『世論』（原著一九二二年）を読んでいた。リップマンは「世論」を個人的な認知心理学的ミクロ・レベルの public opinions と集合的な社会的マクロ・レベルの Public Opinion で使い分けていた（詳しくは拙著『輿論と世論』新潮選書を参照されたい）。キー概念としては、パターン化した画一イメージである「ステレオタイプ」、それが作用する「頭の中の映像」である「擬似環境」

がよく知られている。リップマンは新聞情報による擬似環境の成立がプロパガンダによる合意形成を容易にしたことを指摘している。だが、一日一五分程度しか新聞を読む時間がなかった平均的な市民にとつて、世界中のニュースをステレオタイプで流し込む新聞報道は合理性にかなっていない。

また、ステレオタイプは「大社会」の複雑性を縮減する安心のシステムとして不可欠である。大衆は労働の疲労、生活の不安、都市の喧騒にさらされており、既存のステレオタイプを内省する余裕などほとんどない。結局、マス・コミュニケーションという擬似環境の下では公衆の自律的な合意はありえず、ステレオタイプどおりの世論が形成されることになる。こうした「合意の製造」は大衆民主主義の必然だという。

その弊害を排除するために、情報の収集と配信のコントロールを公共善に奉仕する知的な専門家の手に委ねるべきだとも提案する。さらに、こうしたエリート・システムが有効に機能するためには、まず「万能の市民」という古典的民主主義の発想を放棄するべきだとも述べている。つまり、市民が

よく関心をもち、よく新聞を読み、よく議論すれば、公的な諸問題を十分に処理できるという民主主義の理想モデルの否定である。

確かに、内燃機関の工学知識がなくても自動車の運転は可能だろう。だからといって、同じように一般市民が国際情勢の詳しい知識をもつ必要はない、という結論を引き出すべきかどうか。それを認めてしまえば、「報道の自由」の基盤も掘り崩されてしまう。こうした大衆民主主義へのペシミズムは、リップマンがヒトラーと同じ一八八九年生まれで、第一次世界大戦の前線体験も共有するロスジェネレーションだという事実と無関係ではないはずだ。

●クラカウアー（平井正訳）『カリガリからヒットラーまで』 せりか書房、一九七一年

今年、一五年前の編著『ヒトラーの呪縛』を大幅に増補加筆して中公文庫で復刊した。そのとき意識していた古典が『カリガリからヒットラーまで』である。

クラカウアーはナチ第三帝国から亡命したユダヤ系社会学者だが、ワイマール期の映画史を手がかりとしてナチズムに至る国民心性を

分析した同書（原著一九四七年）は社会心理学的な映画分析のスタンダードとなっている。「ワイマール期のドイツ映画はヒトラー独裁に至るドイツ国民の権威主義的氣質を反映していた」というテーゼは、E・フロムの『自由からの逃走』（一九四一年）をはじめとするフランクフルト学派の大衆社会分析と共振しつつ、ファシズム・イデオロギーの中間層起源論を展開している。そのため、多少ともドイツ史の知識があれば、個別の映画を知らなくてもその内容分析に惹き込まれることになる。

歴史家の多くは政治的事件や経済状況、あるいはイデオロギーに関心を集中させるが、ナチズムのような大衆現象にとって心理的要因は決定的である。クラカウアーは国民心性が映画に反映される理由を、映画制作の集団的性格、さらには不特定多数の支持を得ようとするモチーフ（主題）設定から説明する。これこそ、マスメディアを歴史的史料として使う可能性をひらく視点である。純粋な宣伝映画でさえ大衆の側の欲望や自発性を無視して映画館に彼らを動員することは不可能であり、長期的視点で見れば受け手の欲望こそ映画

の性格を決定するというのである。大衆心性の深層を明らかにするためには、統計的に測定できる人気（個別映画の動員数）より、映像や物語で繰り返されるお気に入りモチーフが重要なのだ。

ワイマール期においては、ドイツ国民の全階層に浸透していた心理的パターンは中産階級の市民的価値観であり、その心性に根ざした映画が労働者を含め国民全体に受け入れられた。市民的価値観からナチズムを考察する立場は、ジョージ・L・モッセ『ナシヨナリズムとセクシュアリティ』（柏書房、一九九六年）などその後のファシズム研究にも引き継がれている。結びの言葉は象徴的である。

『「ニーベルンゲン」の装飾的パターンが、ニュルンベルクにおいては巨人的なスケールで実現した。すなわち、旗の波と人工的に配置された群衆が、現実のなかで再現された。……それはすべて、まさにスクリーン上さながらの光景だ。最後の悲運の暗い予感もまた現実化したのだった』。

大衆心性を描き出したメディア史の金字塔というべきだろう。

（さとう たくみ／京都大学教授）